

## シンポジウム

## 絨毛性腫瘍の発症と予後

座長 名古屋大学教授 石塚 直隆

## 座長のことば

学会がこの主題を選んだ主旨を理解していただく為に本症に関する研究の歩みに触れることが必要かと思う。

本症は古く1895~1898年 Marchand によつて概念の整理が行なわれ、悪性絨毛上皮腫 (Chorionepithelioma malignum) の名称も彼によつて提示されたものである。その後 Meyer, Ewing, Hertig, Novak 等によつて多くの知見が加えられた。

約20年前から化学療法がこの領域に登場してから臨床的に注目を浴びるようになった。然しその黎明期には病態認識にも明らかな混乱があつたと言わざるを得ない。

これに対処すべく日産婦絨毛性腫瘍委員会は昭和38年(長谷川敏雄委員長、当時)に本症を胎状奇胎及び絨毛上皮腫の2種類に分けること、及び胎状奇胎の中に全胎状奇胎、部分胎状奇胎、破壊性奇胎の3種類が含まれるとして見解の整理を行なつた。

胎状奇胎を腫瘍として捉えるかどうかには疑義なしとしないがこれら疾患の相互緊密性と臨床的に同一概念の中で把握することの有用性から一つに包括することに定めたものであつた。その後本症の臨床における進歩として次の4つの点に注目することが出来る。

## 1. 診断の基準が一定の見解に一致をみたこと。

これには Novak (1950, 1954) の業績が大きく寄与している。

原発巣の組織中に絨毛構造を認めないことを絨毛上皮腫診断の原則とすることが国際的にも略々認められてい

る現状である。これによつて破奇と絨腫の混乱が大きく整理された。

2. 化学療法によつて本腫瘍(殊に絨腫)の予後が画的に向上したこと。前述の診断基準の適用によつて破奇と絨腫の治療効果に明確な差のあることが知られた。

## 3. 諸検査法の進歩殊に hCG 測定法の著しい進歩。

hCG 測定は本腫瘍の有力な探知器である。微量測定が可能となり、正確な情報、腫瘍の消長が刻々に捉えられるようになったことは他の腫瘍に比をみない有利な点である。

発症の初期から再発の予知、治療の完了まで客観的に知り得る段階になつて来た。

## 4. 管理体制の確立

胎状奇胎後の管理が診断法の進歩と治療法の向上によつて可能となつたと言えるであろう。続発腫瘍の早期発見、早期治療によつて絨腫の死亡率は半減する傾向にある。

以上のような情勢の中で本シンポジウムは企画されたのである。

ここにいう発症とは発生の問題を含んでいるが、主として腫瘍の初期病像を分析することを主眼としたものである。また予後については治療をも含めて予後向上の手段を追求することである。

speaker は本腫瘍の研究実績のある機関から選ばれた方々であるので優秀な成果が期待される筈である。